いのちをつなぐ。

チョークがポキッ

チョークが折れた
ポキッという音を残して

力の強い先生はチョークをよく折る
人間でいうとほねを折っている
チョークのポキッという音は
チョークの「いたたたた」という声だと思う

チョークの中身は小さい人間
ポキッポキ　チョークが折れた
チョークが折れたまた折れた
折れるとチョークが「いたたたた」

毎日これのくり返し
五年一組の教室で
小さい人間また折れた

坂町立横浜小学校五年　中洲　尊人

夏の雲

今年もやつがやって来た。
友だち千人ひきつれやって来た。
手をつなぎ
ぐんぐん友だち増やして
やって来た。

ぼくの夏休みを
ひっくりがえす巨人が
やって来た。
いきなり大つぶ
なみだをながし
町じゅうに
いかりを落として
ストレスかいしょうしていって
ぼくの夏休みを
とってった。

坂町立横浜小学校六年　田中　良輔

来年も友だち
連れてこい。
ぼくに会いに
やって来い。

一般の部

入賞作品

広島県知事賞

地球儀を回したのは誰だろう

地球儀を回したのは誰だろう
脂のついた指あとを残して
夏が逝こうとしていた

白い病室に
ひまわりが一輪まぶしかった
太陽を見ない友の
いらだちのように
黒い頭状の粒々は尖っていた
内臓に散った癌を
ほうたるの乱舞と詠み
短く病んで
そしてあなたは

広島市　高野　和子

常しえに消えてしまった

田屋の後ろから
秋がのぞき始めている
家の前からすっと延びている
いっぽんの道は
いつも歩きなれている道なのに
季節のすれちがいに起きる
微妙なフラクションに
空は背のびをしたようだ

日の光が弱くなると
田屋も街路樹も
そして　わたしも
やさしく同化してゆく
いっぽんの道は黄に染まり
ぬりかえた絵となって
歩く人のまなざしを深くする
何千の昔から
きっと繰り返されてきたのであろう
自然の不思議な営み

裏山の大きな岩が
ぬらりと光って見えるのは
きっと　張りついたままの
旅人の魂かも知れない

一握りほどの集落に
元気な産声があがった
つる婆さんの二番目のひ孫である
赤子は昼も夜も
線香花火のように泣いている

地球儀を回したのは誰だろう

広島県議会議長賞

冬の思念 ――独楽（こま）に

張りつめた氷のように
いっしんに澄む
けんめいに
昇華しようとするが
とつぜん
めまいにおそわれて
一瞬
おもてを伏せる

背後から
らせん階段を降りてくる
かすかなものの気配に
ゆえもなくおびえて
叫びたくなる声を
必死に抑えながら
小きざみにふるえる肩を
自分自身で抱きしめている

広島市　富松　義典

しだいに
傾いてゆく風景の中
モノクロームの思い出の
光と影のラッシュにもまれ
不覚にもよろめきながら
やがて音もなく倒れこんで
安息の地平に
思わず口づけしそうになる

冬ざれの
小さな廃園の片隅で
ひそやかに寒椿の花が一輪
ぽとりと落ちる
とおい幻聴の時刻――

ゆっくり
溶けはじめた
独楽の哀しみも

また
凍る

広島県教育委員会賞

やまと村

偶然にも
この国の異称をもつ　高原の村
やまとで
祖母は生まれ
九十六歳の長寿を全うした
上下のふくらんだ瞼が
土偶のようにまるく閉じられ
我が家の遺伝的特徴が浮かんでいる

曾祖母も　その母も
そのまた母も
やはり同じ瞼のかたちをして
古代の眠りについたのだろう
おそらく　私の母も
私も　娘たちも
同じ瞼のかたちをして
眠るのだろう

倉敷市　坂本　遊

万葉とたわむれる　花の季節
幼な心は
やまとの野山に染まり
空高く駆け登り

藍色の雲海が村をつつむ
夏の夜明け
高天原に芽生えた恋は
天上の契りを結んだことだろう

ふたつの大きな戦争に追われ
幼な子の手をひいて
秋の　山深いけもの道を
おおらかに走り抜けてきた

冬の夜　降り積もる雪で
やわらかな要塞となる村
祖母の晩年はそのように守られた

ごはん食べていかれ
泊まっていかれ
顔も名前も思い出せない人に

命を養うことばだけは
最後まで忘れず

淡い紫の花が散る
うつし世の衣をほどき
私は　私のやまとを湯灌した
魂が脱ぎ捨てた体は
砂丘に描かれた風紋のように
黄金色の無数の皺を残し
潰えたばかりの大地のようだ

祖母は村の土にかえっていった
母や　私や　娘たちの瞼に
消えないやまとを残して

大和村は現在の岡山県賀陽町。古くから高原の村として知られる。昭和三十年、合併により地名は消えたが、呼び名だけは今も地元に残る。

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

夕焼け

安芸郡府中町　伊達　悦子

いま
私が見ている夕焼けは
地球の反対側では朝焼けかもしれない

バスシートの窓際にうずもれ
ななめに見上げる　きょうの一日
手の甲にボールペンのメモ書き
にじんで消えかかる
忘れてはいけないこと
つま先の痛みが覚えている　はっきり
暮れていく働いた街
あかね色の橋げた
あかね色の原付バイク
あかね色の二の腕
あかね色のキッチンで
おかえりなさい　の文字を
からから　かきまぜて

飲み干す末っ子
夕飯の献立を巡らせながら
ステップを降りる

いまごろ
ブラインドを上げて
ばら色の空に目を細めた　異国語の母親が
卵とベーコンの朝食を準備している

広島市長賞

たずね人

人を捜しています
身長　不明
体重　不明
性別　不明
別れた場所　銀行の前の石段
日時　昭和二十年八月六日午前八時十五分
状況　晴れた空に戦闘機が飛来
原子爆弾を投下
辺りは一瞬に崩壊

私は銀行の前の石段にいた人の影です
あなたを失って動けなくなりました
あなたを待ちました
人が日傘をさして足早に歩む日も
降り積もった雪で人がすべって転ぶ日も
なくした影を求めてさ迷っていらっしゃるの

広島市　吉岡　靖子

では　と
ある時
私は石段ごと資料館に移動することになり
新聞記者が取材して行きました
テレビ局の人が得体の知れない影を映して行
きました
会うことができたら
後を歩いたり前を歩いたり立ち止まったり
いつも一緒にいることができる

六十三年間　あなたを捜しています
ご存知の方はご連絡をお願いいたします

連絡先　広島市中区中島町一番二号
広島平和記念館内
石段の影　宛

広島市議会議長賞

不思議な時間

蒸し暑い寝苦しさに目が覚める
首の辺りを拭いつつ
どの方向に覚めたやら
いつもの位置をつかめぬまま
安定のない時を漂う

ほの暗い窓の在処を見つけると
古びたナビは精一杯
現在位置をおしはかり
眠った脳を揺り起こし
安定感をとりもどす

眠りに入るその前に
やっと見つけたあの言葉
思い出すなど出来なくても

東広島市　下田　和子

風を感じる記憶がすこし
ほんの少しよみがえる

部屋のドアを開け放ち
風の道をつくったこと
微かにすこしよみがえる

昨日の自分と
今日の自分が
繋がっていく
不思議な時間

広島市教育委員会賞

恐竜の声が聞きたくて

恐竜の声が聞きたくなった
どうしようもなく　疲れてしまった夕暮れ
恐竜の声が聞きたかった
同じミスばかりを繰り返して　職場で
まるで　私が
「いなくてもいい人」でもあるかのように
叱られて　叱られた時

恐竜の声が聞きたかった
上司の怒声よりも
戸惑っているお客様の声に　涙がこぼれて
石を蹴飛ばしながら
うう　と顎の辺りに痛みを押し込んで
歪んだ顔のままで
いつもは通らない河岸の　暗がりを
一人歩いて　帰った時

広島市　松本　賀久子

どんなに
古生物学が進歩しても
恐竜の鳴き声と　身体の色　だけは
どうしても分からない　ものらしい
私が　それを尋ねた先生は
マアそのうちに
科学者の先生方が
タイムマシンを作ってくれるでしょう　と
言って　おどけた

ティラノサウルス
君の雄叫びは　どんなに響いていたのだろう
ブロントザウルス
どんな声で君は　愛を囁いたのかな
トリケラトプス
草食恐竜だけど
立派な　角のある君は
どんな　叫び声で　吼えて
自分の領土を宣言したのか

タイムマシン　が出来るまでは
生きている事も出来そうにない　私

決して聞く事のない
恐竜の叫びを　心の奥で微かな音に聞く
まるで
モノクロ映画の
ぎこちない動きをする恐竜の声を
恐ろしく古いテレビの前で
幼稚園の子供に還って
座り込んで　目を見開いて
聞いてでもいるかのように

恐竜の声が聞きたくて
博物館で　触れてはいけない骨格の標本に
そっと　手を伸ばした事もある
まあ　一億五千万年でも生きてから
悩んでみろよ
ふいっと　風が　耳に
吹き込んで来るように
聞こえて来た　誰からなのかは分からない
恐竜の
つぶやき

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

「反戦」の詩（うた）

大竹市　正本　忠臣

ジープが止まる
空に　発砲音が広がる
音は乾いて　リズムのように共鳴し
トンビが　羽を
精いっぱいに広げて　舞い
ゆっくりと旋回しながら　下って来る
トンビの羽は
広がったままで　固い
引きずって行って　ジープに投げると
駄菓子を投げ返してくる
菓子は銀紙に包まれているから
色とりどりに　頭上を越えて
散って行く

土ぼこりの立つ道へ
女の子は布の人形を抱いて　歩み出た
軍用トラックは

急ブレーキを掛けて　激しく軋み
飛び上がって　止まった
手に人形を持ったまま　女の子は
トラックの前に　立っていた
街が沈黙していた
兵士の罵声と
トラックのドアを叩く音が
和音となって
格子戸の街に　静かに流れていく
縦列に停止していたトラックの群れは
前進するために
再びエンジンを掛ける
音は順々に　低い方の音階に加わり
街に大合奏になった

夜中から　地面に座り込んだ
少しだけ夜明けが近づくと
街路樹も　ビルも
陸橋も　淡い青色に包まれる
歩道の霜は　一面に青く燃えていた
寒かったので
同じ毛布の中の人と

背中をこすり合わせて　待機した
街が明るくなる
人々は　兵士達のように
隊列を組んで歩いた
同じ言葉を
指令通りに繰り返した
敵がどこにいるのか　分からなかったから
前の人の靴の
歩く度に　パカパカと口を開ける
踵に向かって
「反戦」を叫んだ
だから
空を　舞いながら下りてきたトンビも
抗って　溝に投げ捨てられた青年も
静かな和音といっしょに
淡い夕日の中に
幻影となって　浮かんだままでいる

入選

沖縄の風

福山市　水嶋　佑子

―　ワ・タ・ル
文字を指でなぞりながら
そっと叔父の名を呼ぶ
摩文仁（まぶに）の丘
梅雨の晴れ間の風が生ぬるい

平和記念資料館の検索システムで
プリントアウトした地図を頼りに
ようやくたどり着いた
都道府県別に整然と立ち並ぶ
屏風（びょうぶ）を模した礎（いしじ）
滑らかな御影石の表面に刻まれた
二十三万人もの人々の名前
その中の一行
古いアルバムの

軍服姿の写真でしか顔も知らない
父の弟

お父さんの兄弟の中では
一番優しかったのよ
墓参りの度に母から聞かされた
　終戦後暫く経って
　負傷した叔父と
　病院で一緒だったという人から
　手紙が届いた
　米軍が上陸すれば皆殺しになると
　仲間と連れ立って病院を抜け出した
　夜の浜辺を逃げている時
　沖合いから闇を裂く探照灯と艦砲射撃
　隣にいたワタル君や仲間が次々に倒れた
　無我夢中で走った　気が付けば
　己ひとり助かっただけだった――　と
そのまま病院にいれば
死なずにすんだかもしれなかったのにね
母の溜息で締めくくられる話
お墓の中には何だか知らない勲章ひとつ

この地に来て初めて知った
陸軍病院はガマだった
深くて暗い壕の中
ガマに投げ込まれた催涙ガスや手榴弾
火炎放射もあったのだと
病院という言葉の持つイメージに
何も疑問を抱かなかった母や私
思わず呟いた
ガマの中では　どのみち
助からなかったんだね　ワタル叔父さん

刻まれた名をなぞる指先が
ヒヤリと冷たい
この海岸のどの辺りで
叔父は波間に沈んだのか
目の前に広がる珊瑚礁の海
六十三年前の叔父と同じ年頃の
若者たちのウィンドサーフィン
色とりどりの三角帆が
潮風を孕んで疾走していた

ミルクボトル

広島市　光見寺　京子

水色の息子のパジャマの胸に、ＭＩＬＫ　ＢＯＴＴＬＥと、プリントされている。
ミルクボトル、とは、牛乳壜のことか。
一歳半になる彼は、二、三時間おきに、たっぷりと、母乳を飲んでいる。彼が透明な壜ならば、歩く度に、白い乳が波打つのが見えるだろう。

小学校、中学校と、私の学校の昼食には、牛乳が出された。
壜に入った冷たい牛乳を、腹の弱い私は、噛み締めるように飲んだ。
一口飲んでは、見下ろす壜は、洗浄して、繰り返し使うために、分厚く、傷だらけで、白く濁って見えた。
〝少しぐらいの傷は大丈夫よ〟

母の声が聞こえてきそうだ。
〝牛乳壜も、子供も〟

今日も、また、息子を傷つけてしまった。
彼が悪い訳ではないのに、苛立ちが大きな声
になって彼にぶつかった。
まだ話せない彼は、何も言わない。しばらく
すれば、ニコニコと笑ってくれる。
だけど、傷ついていない訳ではない。小さな
傷が、また一つ、増えたはずだ。
今日は大丈夫だったかもしれない。
でも明日はどうだろう。

丈夫で健全な、牛乳壜のような子供。私も、
そう見えていたはずなのだ。
だけど、私の心に浮かぶのは、暗闇にぶら下
がる、傷だらけで、白く濁った牛乳壜だ。

西日の入る部屋

西日が入る　狭い部屋には
本が　山積みだった
歩くと　足元の本の角が当たって
バラリと崩れた

崩れた　その本の中の
散乱し　はみ出た一冊
表紙には　炎の海で泣き叫ぶ子供
真夏の　酷暑の朝が
始まろうとしていた

誰も　何も予想しない
お城の　石垣で丸い陰を残して
一瞬に　消えたひと

生きるとか　死ぬとか
選択する余地もなく

福山市　一瀉　千里

こぞって　死の底へと引きずりこまれた
一九四五年の　八月六日
六十三年前の　あの朝
戦争の痛みを
あの日の痛みを
刻印するために　世界中から
必然のように　集まる人々

しかたがなかった
なんて　街ひとつを燃やしておいて
消えた命に　謝罪をすることもなく
まなこを　しっかりと開けて
現状を確認するがいい

西日の入る狭い部屋から
あの日の朝へと　白い道が現れて
スルスルと　繋がってゆく

夏のかけら

降りてくる
何かがここに降りてくる
この部屋に　この椅子に　この身体に
埃のようにふりつもる
空調の風の届かない隙間に
背中を丸めてもぐりこむ
ふり返ると熱に揺れる窓
彼岸と此岸の境のように

ひらひらと
淡い記憶のふりかかる
遠い夏のかけら
あの日も同じように暑かったろうか
小さな部屋の中で
世界が壊れるのを待っていた
全ての記憶はあいまいで

広島市　伊藤　育子

手を伸ばしてつかんだものも
あぶくのように消えてゆく
人工の冷たさに似合いの
山のような嘘だけが
今もそこここに満ちている

何かを伝えようとして
切羽詰まって口にする言葉は
大抵どこかほころんでいて
ごまかしきれずにのみ込んだものは
身体の中に淀んでいく
痛みにしろ　恨みにしろ　後悔にしろ
なにもかもがあふれるばかりで
簡単にはいかない
捨てていけばいいのだけれど
分別できないから　かかえていく

川柳

選者

事前投句

（小・中学生の部）

弘　兼　秀　子

（高校生・一般の部）

中　村　義　雄

番　野　多賀子

当日投句

（高校生・一般の部）

久　保　青　花

小・中学生の部

入賞作品

広島県知事賞

きのいすがもりのはなしをしているよ

廿日市市立佐方小学校五年　天野　靖史

広島県議会議長賞

競技場いすが感動待っている

廿日市市立地御前小学校五年　田川賢太朗

広島県教育委員会賞

私のね大好きないす父のひざ

大竹市立大竹小学校四年　北野　史佳

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

くるまいすぼくがおすからさぁいこう

江田島市立中町小学校六年　加藤　拓馬

広島市長賞

学校の椅子は気合いがはいるんだ

大竹市立大竹小学校五年　永見　一矢

広島市議会議長賞

すわってる人の気持ちが分かるいす

廿日市市立佐方小学校五年　伊永　健人

広島市教育委員会賞

すがりたい心のいすのせもたれに

大竹市立栗谷中学校三年　吉田　裕弥

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

ほけんしついすにすわればほっとする

廿日市市立佐方小学校一年　目﨑　泰地

題「椅子」　選　弘兼　秀子

特選

きのいすがもりのはなしをしているよ

廿日市市立佐方小学校五年　天野　靖史

【評】木の椅子との対話は、まるで童話の世界に入ったようなドキドキさせる句となりました。

競技場いすが感動待っている

廿日市市立地御前小学校五年　田川賢太朗

【評】これから始まるアスリートたちのドラマを待つ観客席。たくさんの感動がうまれるであろう期待が伝わります。

私のね大好きないす父のひざ

大竹市立大竹小学校四年　北野　史佳

【評】あたたかい家庭が見えてくるようです。やさしいお父さんのひざは、大好きな特別な椅子なのです。

くるまいすぼくがおすからさあいこう

江田島市立中町小学校六年　加藤　拓馬

【評】やさしい頼もしい「ぼく」へ「ありがとう」の言葉は涙となるでしょう。車椅子を押せば花も舞ってくれます。

学校の椅子は気合いがはいるんだ

大竹市立大竹小学校五年　永見　一矢

【評】学校での勉強への意欲が感じられ、思わず「頑張って」と声をかけました。「気合い」に句が引きしまります。

入選

すわってる人の気持ちが分かるいす　　廿日市市立佐方小学校五年　伊永　健人

すがりたい心のいすのせもたれに　　大竹市立栗谷中学校三年　吉田　裕弥

ほけんしついすにすわればほっとする　　廿日市市立佐方小学校一年　目﨑　泰地

いすすわり仲良くかいわたのしいね　　呉市立昭和東小学校六年　宮原　亮

いすってね家族の会話聞いている　　大竹市立大竹小学校五年　藤井　雄基

ふんばってがんばっているぼくのいす　　廿日市市立地御前小学校五年　佐々木瑞季

人間はいすにすわるとべんきょうだ　　廿日市市立佐方小学校二年　山田　玲菜

堂々と王様みたい父の椅子　　尾道市立三成小学校五年　笠井　綾花

どきどきだはいしゃのいすはこわいいす　　廿日市市立佐方小学校二年　占ベ千ひろ

このバス停いすがあったらいいのにな　　廿日市市立地御前小学校五年　寺岡　就

長いすはみんな座れる仲良しで
廿日市市立地御前小学校五年　桐林　徹

えいがかんいすがいっぱいおどろいた
廿日市市立佐方小学校四年　森下　拓海

ぼくのいす今年一年よろしくね
廿日市市立佐方小学校五年　奥野　幹也

どっしりとかまえる椅子は父のよう
廿日市市立地御前小学校五年　平田　理紗

式の時たくさんのいすきれいだな
大竹市立大竹小学校六年　田中　亜実

ありがとういすに何かと世話になる
北広島町立川迫小学校六年　織田　千尋

成長を小さくなったいす語る
廿日市市立地御前小学校五年　川本虎之介

おちついてべんきょうできるぼくのいす
広島市立庚午小学校一年　松浦祐太郎

ぼくのクセいすがあるとねすぐすわる
廿日市市立佐方小学校四年　森田　将平

教室でいすがいろいろしゃべってる
大竹市立大竹小学校五年　湯澤　春佳

車いす勇気を出して声かける
廿日市市立地御前小学校五年　古元　貴裕

いすよりは正座でござる日本式
廿日市市立阿品台西小学校六年　宇山　裕貴

きりかぶのいすにすわって昼ごはん
いすを出すひざ手術したばあちゃんに
小瀬川のベンチはいつも川を見る
すわったら回りたくなるいすがある
私がねいすにすわるとおもいかな
たくさんのいすを重ねてピラミッド
椅子すわり勉強モードスタートだ
いすさんはひそかにあせをかいてるよ

大竹市立大竹小学校四年　山田　果歩
大竹市立大竹小学校四年　岡本　悠
大竹市立大竹小学校五年　冨高　諒
大竹市立大竹小学校六年　小出　茜
廿日市市立佐方小学校五年　河添　葵
大竹市立大竹小学校四年　正木　悠貴
大竹市立大竹小学校六年　東條　優子
廿日市市立佐方小学校五年　中川　直也

高校生・一般の部

入賞作品

広島県知事賞

強がりを遠くで聞いた冬の海　府中市　瀬尾美智子

広島県議会議長賞

開発が山椒魚の住み処まで　福山市　金藤　克美

広島県教育委員会賞

飢餓の町遠火で魚を焼くように　呉市　大久保愛子

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

黙もくと黒衣喝采聞きながら　広島市　福田　淳子

広島市長賞

いつの世も時代を開く変わり者

福山市　大岡　重貫

広島市議会議長賞

納屋開けて収穫の秋迎え入れ

広島市　山出恵美子

広島市教育委員会賞

校門はいつも開いてたいい時代

広島市　吉川　徳子

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

初恋は遠くれんげの首かざり

尾道市　日谷　寛

題「開く」　選　中村　義雄

特選

開発が山椒魚の住み処まで

福山市　金藤　克美

【評】渓谷を流れ落ちたり競うた水が一息する志路原川の盆地、山椒魚に寛げる住み処を設け恵贈されたと聞きました。

いつの世も時代を開く変わり者

福山市　大岡　重貫

【評】ちょっと言い過ぎかもしれませんが、小泉元総理は、二世総理の二方と較べると、いい方に変っておられました。

開かれた門を叩いて新分野

尾道市　坂田　敏子

【評】慎重さが光ります。古風な訪問の姿勢、新分野を拓いて行こうとする態度。再度門に触った帰路とを読者の目が推す。

納屋開けて収穫の秋迎え入れ

広島市　山出恵美子

【評】取り入れの風景、私はこの中で働ける齢ではない。懐かしくてここに入れた。稲作農家の作家もいて欲しくなる。

校門はいつも開いてたいい時代

広島市　吉川　徳子

【評】目隠しや用心のための囲い、コンクリ塀の校内。よく学びよく遊ぶ国の宝の小国民に、表門は開いたままだった。

入選

封印の庫からすごい文化財　山県郡北広島町　中野もとえ

新築費家を公開して浮かす　広島市　濵井　尚子

差が開くはずライバルは超真面目　広島市　畑垣よみこ

再利用する気で開くパッケージ　広島市　伊藤　育子

あせらないことも節目を開くカギ　広島市　河浦　邦子

窓際で人生第二幕が開く　広島市　大杉　卓雄

竹へらで開く古代の窓明かり　尾道市　笠井奈那美

病妻へ窓開けてやる朝日の出　東広島市　西田　一之

いっぱいに開く戸がある三世代　東広島市　増田マスヱ

三面を開けば今日も食の危機　尾道市　服部　微酔

ドアは開くものと信じてノックする　福山市　石崎　勝子

小窓開け目線の月へメールする　竹原市　金沢　節生

カードのみ開けた財布に鎮座する　安芸郡府中町　我柳人

アルバムを開いて補充する記憶　大竹市　池本　一成

ごきげん度手作り弁当開けて知る　廿日市市　渡田　悦子

プッシュには気付かずドアの前で待つ　広島市　吉川美佐子

逃げ道は武士の情けで開けておく　呉市　中川　信男

乗り換えだドアが開いたぞ猛ダッシュ　銀河学院高等学校一年　池田　健太

自分の壁壊して未来を切り開こう　銀河学院高等学校二年　尾方　侑希

君だけに見せる笑顔は素の私　銀河学院高等学校三年　高橋　美菜

題「遠い」　選　番野　多賀子

特選

強がりを遠くで聞いた冬の海

府中市　瀬尾美智子

【評】虚勢を張るのは弱者ばかりではない。冬の海が荒れるのは、愚者への警告でもあるようだ。

飢餓の町遠火で魚を焼くように

呉市　大久保愛子

【評】地球が病み始めて久しい。飢餓は人間に永遠のテーマを与えてくれた。今は謙虚に、耳を傾けるべき時であろう。

黙もくと黒衣喝采聞きながら

広島市　福田　淳子

【評】黒衣と民衆の、距離の遥かを思った。笑えないけど「度し難いな。」と納得はしている。僧の苦悩を描写して見事である。

初恋は遠くれんげの首かざり

尾道市　日谷　寛

【評】「れんげの首かざり」をそこに配して、懐かしい思い出を読者に預けた。多くを語らず温かい世界に誘う手法が佳い。

研が返る遠かった父との距離

呉市　中山　美喜

【評】重い内容を「遠かった」でうまく表現している。喜びが湧くように伝わって来るのが自然でよい。

入選

遠い灯が近づく旅がもう終わる　広島市　梶矢　輝實

はるか遠いブッセの空に会いに行く　広島市　宍戸　元信

遠い日の焼きおにぎりよふーっと風　三次市　錦　武志

遠雷へ残柿一つ凡夫なり　東広島市　白井ミツ子

遠雷のここまで来いと父が呼ぶ　竹原市　正畑　半覚

耳とおく笑いころげる老い二人　尾道市　木梨　瑞穂

遠雷と昭和の歌を聴いている　竹原市　富田　汎美

夢一つ遠のいて又夢をみる　広島市　中島　洋子

子の巣立ち父は遠くに置く視点　広島市　小松　好子

遠い耳へハイと答える位置が好き　尾道市　笠井奈那美

百歳へロマンを語りながら行く　広島市　河浦　邦子

大好きなバアちゃん星になりました　広島市　河内　郷輔

形見まとえば遠い日の風赤とんぼ　広島市　江川　美栄

都会から遠く離れて灰汁を抜く　東広島市　白井　孝司

跡取りの鎖をはずす日が遠い　庄原市　河面しずこ

遠くてもいい頂上を目指す足　広島市　川上　咲良

遠くなるバラの香りと炎の記憶　広島市　沖野おさむ

寄り道をさせない父の遠眼鏡　江田島市　住田　照水

濡れ衣を晴らすと距離が遠くなる　三次市　錦　佳秋

遠ざかる夢追いかけて切れた糸　庄原市　荒木美智子

作品募集要項

■趣旨

文芸に親しむ人々から広く作品を募集し、発表、交流の機会を設けることで、文芸への理解を深め、広島県の文化を高める祭典とします。また、合同大会（入場無料）を実施し、各分野の入賞作品の表彰を行います。

■主催

けんみん文化祭ひろしま実行委員会、けんみん文化祭開催市町実行委員会、中国新聞社

■事業内容

作品を募集し、審査を行い、入選・入賞作品を決定し、入賞作品を表彰します。

■応募締切

平成２０（2008）年９月１６日（火）　必着

■応募資格

広島県内に在住している者、通勤、通学している人及び出身者

■応募先・問い合わせ先

【郵送】　〒730-0051　広島市中区大手町一丁目５－３
広島県民文化センター内　（財）ひろしま文化振興財団
【インターネット】　http://www.hiroshima-kenbunsai.jp
（けんみん文化祭ひろしま実行委員会ホームページ）

■賞

短歌、俳句、現代詩、川柳の分野ごとに広島県知事賞・広島県議会議長賞・広島県教育委員会賞・けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞等を授与します。

■合同大会（入賞・入選発表、表彰式等）

日時：平成２０（2008）年１２月２１日（日）午後１時～
場所：広島国際会議場地下２階　（広島市中区中島町１－５）

■作品集

短歌、俳句、現代詩、川柳の４分野合同の入賞・入選作品集を刊行し、合同大会会場にて無料配布します。また、郵送を希望される場合は、郵便番号・住所・氏名を明記の上290円切手を貼付した返信用封筒（横19㌢×縦24㌢）を応募先に郵送してください。
なお、応募された作品の版権は、けんみん文化祭ひろしま実行委員会に帰属します。※全応募作品を掲載した作品集は作成しません。

短　歌　応募規定

●応募区分
一般の部　　小・中・高校生の部

●作　品
未発表作品とし、一人一首とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法
所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他
応募規定に違反する場合は、入選、入賞を取り消します。

共　催：広島県歌人協会

俳　句　応募規定

●応募区分
一般の部　　小・中・高校生の部

●作　品
未発表作品とし、一人一句とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法
所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他
応募規定に違反する場合及び盗作・類句と認められた作品は、入選、入賞を取り消します。

共　催：(社)　日本伝統俳句協会　　(社) 俳人協会広島県支部　　広島県現代俳句協会

現代詩　応募規定

●応募区分
一般の部　　小・中・高校生の部

●作　品
未発表作品とし、一人一編とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法
所定の応募用紙、または原稿用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。本文は、原稿用紙3枚以内とします。応募用紙が複数枚になる場合はコピーして使用してください。

●その他
同一作品による他の文芸事業への重複応募はお断りします。応募規定に違反する場合は、入選、入賞を取り消します。

共　催：広島県詩人協会

川　柳　応募規定

●応募区分
高校生・一般の部　　小・中学生の部

●作　品
未発表作品とし、一人各題二句詠とします。(応募作品はお返ししません)

●応募方法
所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他
応募規定に違反する場合及び盗作・暗号句と認められた作品は、入選、入賞を取り消します。

共　催：広島県川柳協会

けんみん文化祭ひろしま'08　文芸祭　応募状況

地区	市町	短歌		俳句		現代詩		川柳	
		一般	小・中・高	一般	小・中・高	一般	小・中・高	高校・一般	小・中
広島	広島市	118	162	163	515	20	82	101	2
西部	大竹市	5	13	5	17	2	0	7	784
	廿日市市	16	15	13	24	2	2	22	565
呉・安芸	呉市	34	101	19	243	9	18	32	46
	江田島市	6	22	7	35	1	0	5	93
	府中町	9	0	13	245	1	0	8	0
	海田町	7	0	6	0	0	0	0	0
	熊野町	4	0	2	0	0	0	1	0
	坂町	0	12	2	19	1	73	2	0
東広島	東広島市	24	3	31	445	5	5	34	0
芸北	安芸高田市	13	32	5	25	1	0	1	0
	安芸太田町	0	0	5	0	0	0	0	0
	北広島町	12	32	2	8	0	0	2	19
尾三	竹原市	4	50	3	21	1	0	12	80
	三原市	32	45	12	7	3	0	6	0
	尾道市	11	0	24	123	2	1	16	1
	大崎上島町	0	0	0	0	0	0	2	0
	世羅町	10	18	0	177	1	10	1	29
福山	福山市	24	426	146	1121	28	18	282	3
	府中市	14	8	9	197	2	0	10	0
	神石高原町	0	3	1	18	0	0	0	0
備北	三次市	26	10	17	127	0	2	5	1
	庄原市	19	36	29	220	8	0	9	10
県内小計		388	988	514	3,587	87	211	558	1,633
県外		2	0	1	0	1	0	0	0
合計		390	988	515	3,587	88	211	558	1,633

けんみん文化祭ひろしま'０８　文芸祭 大会記録

【開　催　日】　平成20年12月21日（日）

【場　　所】　広島国際会議場

【主　　催】　けんみん文化祭ひろしま実行委員会（広島県、広島県教育委員会、市町、市町教育委員会、広島県文化団体連合会）、けんみん文化祭ひろしま開催市町実行委員会、中国新聞社

【共　　催】　㈶ひろしま文化振興財団、広島県歌人協会、㈳日本伝統俳句協会、㈳俳人協会広島県支部、広島県現代俳句協会、広島県詩人協会、広島県川柳協会

【プログラム】（予定）

- 合同大会（13：00～13：40）

  入賞作品の発表・表彰式　等

- 分野会（13：50～）

短　　歌

各選者による講評　等

俳　　句

各選者による講評　等

現 代 詩

入選者の表彰、各選者による講評、入賞・入選者による応募作品の朗読　等

川　　柳

各選者による事前投句の講評、当日投句の入賞・入選発表　等

※当日投句の題は10：30に発表

※当日投句は10：30から11：30まで受付

けんみん文化祭ひろしま'08　文芸祭 合同作品集

編集・発行　平成20年12月

けんみん文化祭ひろしま実行委員会
〒730-8511　広島市中区基町10-52
広島県環境県民局県民文化課内
TEL(082)222-3774

財団法人ひろしま文化振興財団
〒730-0051　広島市中区大手町1-5-3
広島県民文化センター内
TEL(082)249-8385

印　　刷　朝日精版印刷株式会社